

「神を賛美するために」（ルカによる福音書一七章一一〜一九節）

1 サマリアとガリラヤの間

今日の箇所、十人の重い皮膚病の人のいやしですが、イエスのガリラヤ伝道を思い起こさせるものがあります。

思い起こさせるというのは、ガリラヤではしばしばいやしがなされ、その中には重い皮膚病の人もいたからです。

そのガリラヤを出て、エルサレムに向かうようになって、イエスのいやしは、記事としては少なくなつたように感じられるかも知れません。確かに多くはありません。しかし所要所に伝えられています。安息日に、腰が曲がった婦人をおいやしになつたことも（一三・一〇）、水腫の人をいやされたこともありました（一四・一）。次章一八章には、盲人のいやしが伝えられています。そして今日の箇所、十人の重い皮膚病の人のいやしです。

とはいえ、いやしの記事があまり多くないことは、確かです。それについてはこう考えることができるように思います。

いやしは、だれにも分かる神の恵みのしるしです。イエスが神の力をもっていることの証しです。しかしそれが知れわたっていくと、イエスに反対している人たちは都合が悪くなります。

イエスに反対している人たちとは、ファリサイ派の人びと、律法学者たち、そして祭司、長老たちなどです。民衆の宗教の指導者を自認していた人たちです。民衆のあいだでイエスの評判が高くなると、自分たちの権威は落ちてしまいます。それは面白くない。イエスの活動の場がガリラヤならそれほど気にならないかも知れません。というのもそこは都エルサレムから見れば、遠い遠い辺境の地ですから。しかしイエスがエルサレムに近づいてくれば話は別です。

イエスがエルサレムに向かいつつある中、彼に反対する人たちは、いまやつねにイエスにつきまとい、やり込めようと監視し、動向を注視していたのです。軋轢は高まり、イエスとの対決場面も増えて行きます。こうしたことが、いやしが少ない印象をもたらしているのかも知れません。しかしいやしはずっとなされていた、これは忘れてならないことです。

いま、聖書の見出しにしたがつて、この箇所について（重い皮膚病をわずらっている十人のいやし）と言いましたが、それで、ここにあることが全部言い表されているわけではありません。

むしろ、いま読んでお分かりのように、重い皮膚病をわずらっていて、いやされたのは十人ですが、そのうちの一人が、神を賛美しながら戻って来たというのが、この箇所の眼目です。彼はイエスの足もとにひれ伏し感謝した。そしてその人は、じつはサマリア人であったというのです。

最初に状況を確認しておきましょう。

イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた（一一節）。

すでに私ども、イエスが、固い決心のもと、エルサレムに向かいつつあることを知っています（九・五一）。

それがここで改めて確認されます。その上で、どこを通過して、エルサレムのあるユダヤに行ったか記されます。

「サマリアとガリラヤの間」とあります。その意味は、サマリアとガリラヤの境界線に沿ってというような意味です。

この地域は、上から（北から）、ガリラヤ、サマリア、ユダヤです。ガリラヤからユダヤには、サマリアを通り抜ければいいのですが、サマリアとは同じ民族ながら昔から関係が悪く、その場合には、サマリアに入らず、境界線に沿ってヨルダン川の東側に出たのです。

このあと十人の重い皮膚病を患っていた人が出て来ますが、少なくともその一人はサマリア人でした。残りの九人についても、全部がユダヤ人であったか、分かりません。境界地なので混じり合い、民族的な違いを超えて一緒に暮らしていたことも十分ありうることです。

2 戻って来た

さて、こんなことが起こったと書いてあります。

ある村に入ると、重い皮膚病を患っている十人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま、声を張り上げて、「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」と言った。イエスは重い皮膚病を患っている人たちを見て、「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」と言われた。彼らは、そこへ行く途中で清くされた（一二〜一四節）。

まず「重い皮膚病」ですが、ここで使われている元の単語、ギリシャ語で（ヘレプラー）というのは、広い意味での皮膚病のことです。旧約レビ記一三章に詳しく書いてあります。今日の箇所について、ハンセン病と考えることは、一般に正しくないと考えられています（J・グリーン）。

「遠くの方に立ち止まったまま、声を張り上げて」。これは、この人たちは、一般に人に近づくことを禁じられていたからです。住まいも町の外でなければならず、多くは洞窟などに住んでいました（レビ一三・四五以下）。

「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」とイエスが命じたのは、この病気は、たんなる病気とは見なされず、神の呪いとか、汚れているものと見なされていたからです。それゆえ、体が治ったときにも、祭司たちによって「清い」（汚れていない）と言ひ渡されなければならなかった。そのお墨付きがなければ社会に戻ることはできなかつたのです。

その祭司たちのもとに行く途中彼らは「清く」されたとあります。この「清く」と

いうのは、祭司に体を見せる前ですから、身体的に治ったという意味と考えてよいと思います。

こうして治った上で、ユダヤの宗教の手続きを踏むことをイエスは勧めているのです。ここまではガリラヤでもあったことです（五・一二以下）。しかしここで、それを超えることが起こったのです。

その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった（一五〜一六節）。

一人の人が、一人だけが「戻ってきた」のです。つまり「祭司たち」のところに行かなかったのです。行かなかったら、本当は、たとえ身体的にはいやされていたとしても、真の意味では清められない、救われない、社会に戻ることもかなわなはずなのです。しかし、ともかく彼は行かなかったのです。逆にイエスのところに、大声で神を賛美しながら戻って来たのです。

イエスが行くように指示した祭司たち、祭司は神殿にいるわけですが、その神殿とはエルサレム神殿のことか、それともサマリア人たちが信じていたゲリジム山の神殿のことか、ふつうに考えれば、エルサレム神殿でしょうけれど、はっきりしないところがあります。

それははっきりしないとしても、この人が、祭司のところに、つまり、神殿に行かなかったということははっきりしています。「戻ってきた」とは、イエスのところに来たということです。すなわち、このイエスと共に神がいます。どうしてあえて神殿に行くことがあるでしょうか。ここに神がいますのです。この人は、このサマリア人は、その行動によって、イエスを神として告白しているのです。

そのような行動をとった一つのきっかけが、小さな言葉で語られています。「自分がいやされたのを知って」です。途中でいやされた、清められた、それは残りの九人も同じでした。

しかしこの一人の人は、自分がいやされたことを、そのまま、神の救いと受けとったのです。それ以上何が必要なのでしょう。イエスによって救われた、それが神の救いであるなら、それ以上の何かお墨付きが要るのでしょうか。祭司のいやしの宣言は必要ではないのです。

3 信仰

戻ってきた一人のサマリア人。イエスの足もとにひれ伏し感謝する彼の行動は、私には、神殿を中心とした当時のイスラエルの宗教に決定的に大きな転換をもたらすことになったように思われます。

しかしこの転換、それは、そもそも、イエス・キリストによってもたらされた、もたらされつつあったものです。

というのも、もともと、当時の神殿を中心としたイスラエル宗教では、救いはサマリア人に開かれていなかったのです。サマリア人に、救いと福音をもたらしたのはイ

エスにほかなりません(ヨハネ四章)。

重い皮膚病の人もまた、当時の神殿を中心としたイスラエルの宗教において、徴税人や罪人、そして貧しい人と共に、神の民の周辺に置かれて、救いから閉め出されていた人たちです。しかしイエスによって、神の国の福音が宣べ伝えられたとき、そのような人々もまた、いな、まさにそのような人々こそが、神の国にふさわしい者として迎え入れられたのです(四・一八以下)。

そうであれば、サマリア人であり、重い皮膚病を患っているという、二重の意味で神から隔てられていた彼が、イエスによるいやしを知ったとき、どれほどの驚きをもって、どれほどの感謝をもって受けとめたでしょうか。その思いが一人戻ってきてイエスの足もとにひれ伏し、感謝したという彼の行為に明らかに示されたのです。あの九人よりもどんなにその思いは深かったかということです。それもイエスが開いて下さった救いの道であったのです。

もう一つ、イエスが、すべての人に救いをもたらしつつあったこと、すべての人に救いの道を開きつつあったことも、この段階で、私も思い起こしておいてよいと思います。

それは、イエスが、エルサレムへ向かっている意味に関わることです。エルサレムに向かうというのは、十字架に向かうことです。十字架は、それにかかってイエスがすべての人の罪をあがなうことです。罪はあがなわれなければなりません。しかしそれを私ども罪ある者がなすことはできません。罪なき方、神の子イエス、ただひとりなしうることです。それは、人の罪を背負って十字架につけられることで遂行されることです。そのエルサレムに向け、いま歩んでいます。

さてイエスは、この戻ってきた一人のサマリア人に対して、次のように語っておられます。

立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った(一九節)。

本当に力強い言葉です。このようにイエスに言われた人は、まことにさいわいなことです(七・五〇、八・四八、一八・四二)。

一つは、彼が残りの九人と一緒にイエスを迎え出て、「イエスさま、先生、どうか憐れんでください」と叫んだとき、それは決していい加減なものでなかった、本当にイエスに救いを求めたということでしょう。そこに表れた信仰が、確かに、彼を救ったのです。

しかしそれだけではありません。もっとも印象深いのは、彼がいやしに気づいたとき、過分な恵みを受けたこと、値しないのに受けたことに対する、ほとぼしるような感謝の信仰でした。

この方が、イエス・キリストが、私をいやしてください、救ってください、この方において神が力をもって働いてくださった、この方こそ神、この方に感謝し信頼して歩む、そのような素朴な決意、それが彼の信仰です。それにイエスは目をとめてくださいました。彼にとってこれ以上の幸いはないと言わなければなりません。彼は立ち上がって歩みはじめます。

(二二年五月二九日)